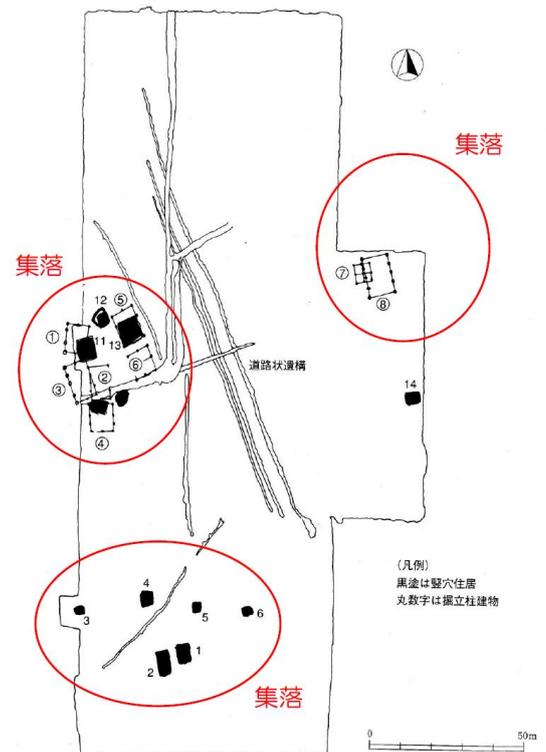


## 古代の栗田遺跡

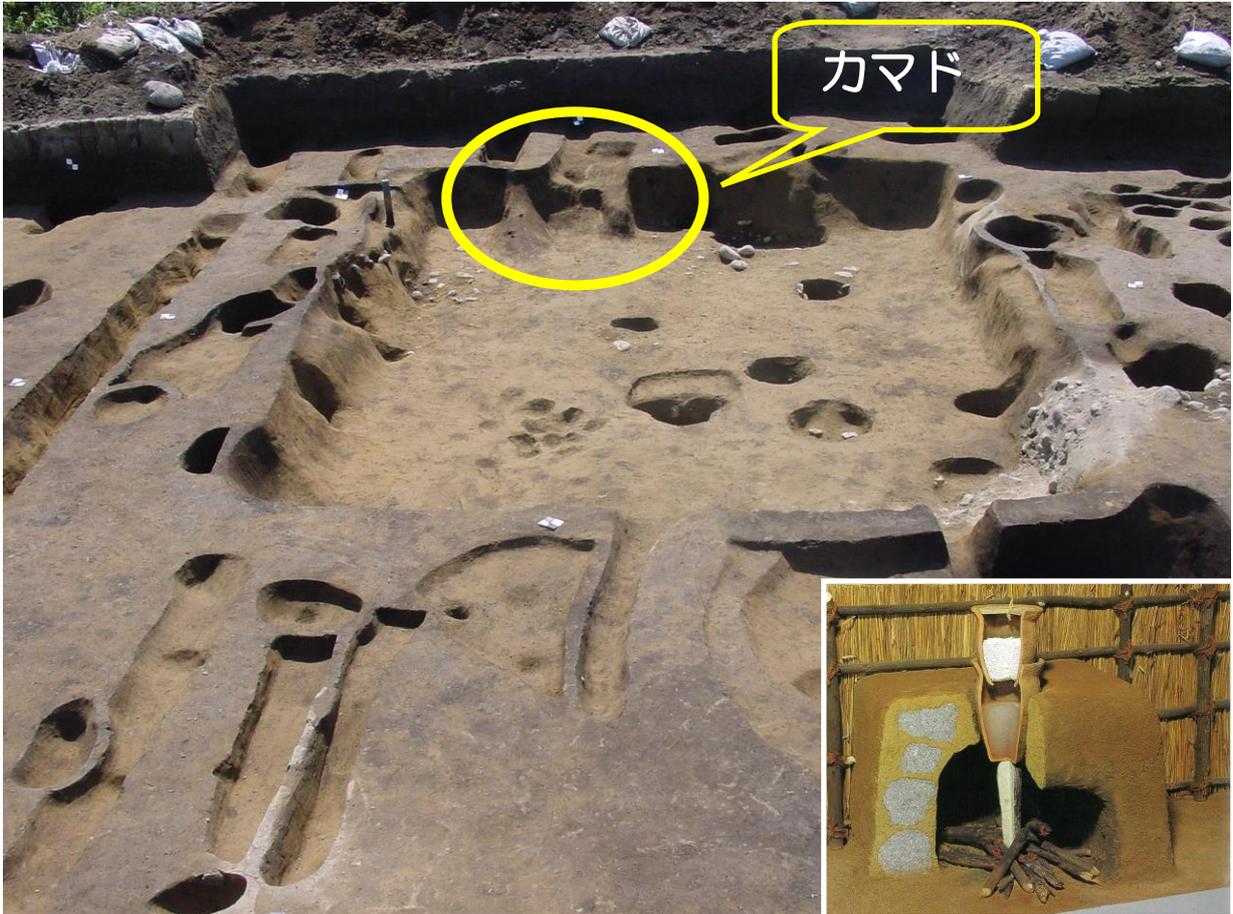
栗田地域を含む手取川扇状地扇央部は、地下水位が低く、かつ、河川によって運ばれた大量の石礫が堆積する土地柄であったことから、6世紀頃までは耕作地の開発は極めて困難でした。しかし、7世紀に入ると、耕作具（鉄製品）の発達などから、土地の開墾が進み、次々と耕作地が作られていきます。それに伴い、集落が末松、新庄地域で営まれていきます。

栗田遺跡では、8世紀中頃から9世紀前半にかけての集落が確認されました。集落は、カマドを有した竪穴住居や、掘立柱建物が数棟ずつ存在し、これらが点在する散居村的な様相であることが分かりました。

また、集落と集落の間には、人や物資を運ぶための道路跡を確認しました。見つかった道路は南北と東西方向の2本で、路面の両側には側溝を設けています。南北方向の道路幅は4.2mで、後に2.8mに縮小されます。東西道路は4.6~5.2mを測ります。



古代主要遺構図（平成元年度調査地）



竪穴住居跡

カマドの復元  
(復元技術と暮らしの日本史より)



道路跡 (図説野々市町の歴史より)